

肥前国平戸藩益富家文書から見る西海捕鯨業（二）

―安政期「割」史料の分析―

末 田 智 樹*

第一章 はじめに

近世の西海捕鯨業は、複数藩域にまたがる広域的な操業形態を特徴とし、とりわけ肥前国平戸藩生月島を拠点とした益富又左衛門組（以下、益富組）は、その中心的存在として知られる。益富組は、本拠地の平戸藩以外の広範な地域から労働力を動員し、複数の鯨組を同時に運営する「藩際捕鯨業」を展開した点に独自性がある⁽¹⁾。

筆者はこれまで、嘉永期（一八四八〜一八五三）を中心とした「割」史料の翻刻と分析を通じて、益富組が人的資源をいかに調達・配分し、広域的な捕鯨業経営を成立させていたのかについて検討を進めてきた⁽²⁾。膨大な労働力を複数の鯨組へと効率的に配分する「割」と呼ばれる益富組の仕組みは、他藩の捕鯨漁場への進

出を支えた人的資源管理の根幹をなすものである。こうした視点から、近世中後期の西海地方において、最大規模の鯨組へと発展した益富組の経営組織および生産地域の実態について考察を重ねてきた。その結果、羽指・友押・若衆といった従事者が三組から五組の複数の鯨組に編成され、漁場の状況に応じて柔軟に組織再編が行われていた様相を明らかにした。

とくに、捕獲技術の中核を担う羽指の継続性と、友押の広域的な流動性が併存することで、嘉永期までの益富組の拡張を支えた労働力の特徴が確認できた。しかしながら安政期（一八五四〜一八五九）に入ると、捕獲量の減少に加え、藩からの借財の増大などにより、捕鯨経営を取り巻く環境は急速に悪化した。このような状況のもとで、益富組も経営の縮小・停滞を余儀なくされ、衰退局面へと移行していった⁽³⁾。

そこで本稿では、この衰退期にあたる安政元年（一八五四）から同六年（一八五九）、さらに今回翻刻する史料上「安政七年」と記される万延元年（一八六〇）までの新出の「割」史料を翻刻し、その分析を加えたい。これにより、衰退期における益富組の労働力配置の実態を検討する。

拙著における嘉永期の研究との比較を通じて、経営が困難に直面した衰退期において、益富組はいかなる労働力配置を維持し、あるいは変容させたのかを明らかにする。とりわけ、第一に鯨組組織における羽指層の存在と編成時の巧みな配分、第二に友押の出身地の偏在、第三に羽指と友押の定着性の差異とそのバランス、という三点に注目する。

また、宇久島などの特定地域への依存度や労働力の供給地域の特徴を再検証することで、衰退期における大規模捕鯨業経営の存続基盤について考察する。これは単に一巨大鯨組の消長を追うだけでなく、西海地方における藩境を越えた広域的な労働力の雇用構造とその歴史的意義を、産業史的観点から再考する試みでもある。

第二章 翻刻史料の分析

本稿で紹介する安政期（一八五四～一八五九）の「割」史料（表2～26）は、益富組が経営上の困難に直面していた衰退期の内部組織を如実に示すものである。その編成内容を検討すると、安政期は捕鯨業経営の衰退が顕在化する時期にあたり、労働力配置に

も変化が生じていたことが確認できる。史料に記載された羽指・友押の名簿を精査してみると、安政期の労働力配置にはいくつかの特徴が認められる。

（一）益富家文書の「割」史料

益富家文書には、捕鯨組織の内部編成を示す「割」史料が多数残されている。⁽⁴⁾表1は、現時点で直接確認できた「割」史料を一覧化したものである。これらの史料は、天保期（一八三〇～一八四三）以降、弘化・嘉永・安政期（一八四四～一八五九）を中心として、明治初期に至るまで継続的に作成されており、益富組における労働力配置や操業体制の実態を具体的に示している。⁽⁵⁾

表1では「表裏紙等の備考」としてあるが、作成時期を見ると、多くは冬組・春組の開始時期にあたる十一月および二月頃に集中しており、操業開始に向けた労働力配置や役割分担を把握するために作成されたものと考えられる。記載内容は、「別当」「若衆」「羽指」「友押」といった職種ごとの編成を中心とし、各人の名前や出身地などが記されている。羽指割・友押割は、捕獲現場における実務的な組み合わせを示すものであり、拙著でも考察したように、羽指間の力量の均衡や羽指・友押間の関係性を反映していたことは間違いない。⁽⁶⁾別当割は昼屋を名乗る益富家の分家・別家によって構成される各組支配人の役割分担を示し、若衆割は納屋場運営や連絡業務などを含む細かな職務分担を明確にすることで、作業の円滑化を図るために作成された史料と考えられる。

さらに、「流番」からは、羽指による回遊鯨の探索・監視を担う役割が確認できるほか、「船割」「網割」「帆割」「前細工割」などの史料からは、鯨船編成や鯨船・漁具・船具などを準備し操業体制を整える前細工における作業分担の実態がうかがえる。「小納屋道具割」からは、鯨解体作業をめぐる益富組の大納屋との関係を示す納屋場内部の役割編成を把握することができる。加えて、表1では「■」を付した一部の史料は、単年度の労働力配置にとどまらず、複数年にわたる配置状況を集計的に整理したものであり、益富組が長期的視点から組織運営を行っていたことを示唆している。

表1に掲げた「割」史料は単なる人名帳ではなく、沖場・納屋場を含む益富組全体の操業体制を掌握し、調整するために作成された内部管理上の重要な記録であったと考えられる。包紙や表紙等の記載から、おそらく別当畳屋の支配人層によって作成され、最終的には益富家当主の承認を経て運用されていたものと推測される。表1のなかでも最も多く確認できる安政期に作成された表2・26の史料は、益富組の衰退期における労働力配置および操業体制の変容とともに、廃業直前に至るまで鯨組として操業を維持していた実態を具体的に示す史料として、幕末期の経営を検討するうえで不可欠である。

(二) 羽指の継続性と捕鯨漁場での流動性

羽指については継続性と階層の固定化が指摘できる。⁽⁸⁾とくに、

捕獲量の減少や経営資金の逼迫により、新規雇用や組織拡張が困難となった結果、既存の中核メンバーを維持する方向が一層強まったことがうかがえる。拙著で明らかにしたように益富組の羽指は定雇であり、しかも世襲的性格を有していた。⁽⁹⁾これにより、鯨船の指揮と捕獲を担う技術職である羽指は、嘉永期(一八四八～一八五三)から安政期(一八五四～一八五九)にかけて極めて高い継続性を示している。

表2の安政元年冬組から表5の安政三年春組までの御崎組の勢子船の羽指では、梶右衛門・鷺右衛門・豊大夫の三名が継続して確認でき、この組の親父羽指であった可能性が高い。⁽¹⁰⁾また、表2・4の記載は表20・21の御崎組の羽指名とも一致している。これら三名については、拙著で検討した嘉永期の益富御崎・前目組などにおいても、羽指名の上位三名として確認される。ただし、豊大夫については四番目に記載される場合も見られるが、安政期に入ると豊大夫は三番目に位置づけられており、親父羽指へ昇進した可能性が考えられる。⁽¹¹⁾

さらに、表6・7からは益富組全体における羽指の階層において、太五郎が最上位の親父羽指であったことが確認できる。太五郎は嘉永期以来、継続して筆頭を務めていたことがわかる。なお、太五郎の下には市左衛門、その下には梶右衛門が位置していた。⁽¹²⁾表20・21によれば、安政元・二年には太五郎が壱岐の勝本・前目組を担当していたことがうかがえる。しかしながら、表22の安政三年になると太五郎は御崎組へ移り、梶右衛門が勝本組へ移動し

ている。こうした動きは拙著で指摘した嘉永期の状況とも整合的であり、羽指の階層が一定程度固定化しつつも、益富組全体としては鯨船種別の枠組みのなかで流動的な配置が行われていたことを示している。また、上位の親父羽指および三番目以下の羽指についても、拙著で指摘したように各表の羽指部分全体から見て流動的でありつつも、力量の均等的配分が図られていたことが看取できる。

太五郎は安政四年冬組（表 8・9・22・23 など）以降には追跡できなくなる。このため、御崎組では佐次兵衛が三番目に位置するようになるが、その上位には壱岐の勝本・前目両組を含めて、前述の梶右衛門・鷺右衛門・豊大夫以外に伝次右衛門・勝大夫・寅大夫・八大夫・清蔵らが存在していた。¹³この点は、とくに表 11 および表 21・24 から読み取れる。

羽指は捕獲技術の中核を担う存在であり、高度な経験と判断力が求められるため容易に代替できる職種ではなかった。そのため、安政期のような衰退局面においても益富組が上位の羽指層を維持し続けたことは、技術継承の重視と操業安定性を最優先した経営判断であったと考えられる。

一方で、益富組全体では一定の入れ替わりが認められ、上位者の引退に伴って次位層が昇進する構造が見られた。このことから、益富組では中核的人材を育成・確保するとともに、組間での配置転換や階層上昇を通じて、現場での経験や実績を踏まえた労働力配置が行われていたものと考えられる。したがって、羽指層の固

定化と組間の流動性人員の入れ替わりの併存は、嘉永期以降の益富組における人的資源管理の特徴として注目され、その末期経営を理解するうえで重要な視点となる。

さらに、このような人的資源管理を可能にした背景には、羽指層に見られる世襲的継承の存在が関係していた可能性も考えられる。例えば、各表に見られる羽指見習いと考えられる「増加子」には、表 2 の「久米七ノ寅左衛門」「丹蔵ノ牛右衛門」などの事例が確認できる。¹⁴これらについては、別史料においてそれぞれ久米七・丹蔵の「倅」と記されており、羽指層において親子間の捕獲技術の継承が行われていた可能性を示唆している。とりわけ、捕獲技術の継承と人材の安定的確保という観点から見れば、このような世襲的継承は羽指層の再生産を支える重要な要素であったことも推測される。もつとも、世襲的継承と人的資源管理との関係については、今後さらに検討を深める必要がある。

（三）友押の困い込みと出身地偏在の継続

本節では、安政期（一八五四～一八五九）の「割」史料に記載された友押の出身地に注目し、その地域的特徴を明らかにする。「割」史料において捕獲係である羽指に次いで重要な役割を担うのが、捕鯨船の操船を司る友押、すなわち加子を統率する船頭である。その出身地の偏りは、益富組における労働力調達の構造を理解するうえで不可欠な要素となる。¹⁵

安政期における友押の出身地を詳細に検討すると、嘉永期（一

八四八（一八五三）に見られた出身地構成をさらに尖鋭化させたような地域的特徴が浮かび上がる。この点は嘉永期に引き続き、特定地域への集中傾向が明瞭に認められることから裏付けられる。羽指とは対照的に、友押には人員の入れ替わりが頻繁に確認できる。友押については、もちろん長期雇用される者も見られるが、一年もしくは数年単位での交替が多く、安政期においてもその傾向は継続している。しかしながら、友押の入れ替わりは広範な地域から生じたものではなく、後述するように特定の地域社会に深く依存した形で行われていた。安政期において人的資源の「囲い込み」が顕在化していたことは、表2～19・26に示した友押の出身地の比較から明らかである。

すなわち、個々の友押は入れ替わるものの、その出身地はほぼ一定であった。安政期の友押は、宇久島（下山・平・神浦・飯良・小浜・長野・蒲浦など）の出身者が最も多く、これに小値賀島（斑・黒島・笛吹・前方・寺島など）の出身者が続いており、嘉永期以来の出身地偏在が維持されていたことがうかがえる。¹⁶表2～19・26を見ると、宇久島出身者は各年で八～二十三名程度確認でき、その人数には多少の幅がみられるものの、全体としては多くの友押が雇用されていたことがわかる。とくに、表14・16・17では二十二名、表11・13・15では二十三名に達している。一方、小値賀出身者は二～六名程度であった。ただし、これは御崎組における状況であり、表13～19の壱岐の両組および五島藩板部組では、小値賀出身者は見られなかった。

これは、安政期において益富組の衰退が嘉永期以上に深刻化するなかでも、五島藩の宇久島や同じ平戸藩の小値賀島およびその他地域との労働力調達網を保持しながら、その供給源を信頼性の高い特定の地域社会へと収斂させていったことを示している。

益富組の本拠地であった生月島の御崎組にあつても、同島および壱岐出身者は三名程度にとどまり、ほとんど見られず、とくに宇久島への圧倒的な依存が明らかとなる。このことから、生月島周辺の島嶼部において友押のほぼ全数が供給されていた実態がうかがえる。また、地縁に基づく集団化の可能性も指摘できる。宇久島の各集落から複数の友押がまとまって動員されている様子が見られる。¹⁷これは単なる個別雇用ではなく、宇久島の村落共同体と益富組との間に、安定的な労働力供給をめぐる準組織的な関係が形成されていたことを示唆している。

このように安政期における益富組は、宇久島を中心とする特定の地域社会に対して強い依存関係を示していた。もともと、この点については土肥組・中尾組など他の巨大鯨組との比較検討を要するものの、こうした傾向は益富組の重要な特徴であったといえる。したがって、益富組は最も信頼性の高い特定の地域社会に労働力供給源を集中させることで、同時に複数組を展開可能とする供給システムを構築していた。このことが、益富組を西海捕鯨業史上において長期にわたり巨大鯨組として存続させた要因の一つであったと考えられる。加えて、宇久島が西海地方における熟練友押の主要な供給地であったことを示唆している。

（四）双海船の出身地とその変化

双海船（網船）の船頭・加子の出身地は、友押とは異なる歴史的展開を示している。近世中期以降、双海船の雇用地域は、まず備後国田島に集中していた。¹⁸ 拙稿で論じたように『福山志料』には、「肥前五島平戸ノ鯨船ノ漁人多クハココヨリ出ル、七月二行四月二カヘル」と記されており、田島は西海捕鯨業における主要な供給地であった。益富組を含む西海地方の鯨組は、田島の漁民を双海船の船頭・加子として恒常的に雇用していた。¹⁹

しかしながら、宝暦期（一七五一～一七六三）から寛政期（一七八九～一八〇〇）にかけて、双海船の雇用地域は田島から周防国の島嶼部へと広がりを見せる。『防長風土注進案』には、佐郷島の漁民について「九州鯨組江行相稼者も有之」と記されており、さらに近隣の牛島・岩見島の島々を含めると、百人を超える規模の出稼ぎが存在していた。双海船の雇用圏は田島を中心としながら、周防国の佐郷島・牛島・岩見島へと拡大し、瀬戸内海から西海地方へとまたがる季節的な労働力供給のネットワークが形成されていた。²⁰

表4～9および表17・18によれば、双海船の出身地に変化が認められる。従来見られた佐郷島・牛島・岩見島の名は姿を消し、田島に加えて新たに矢島・四代が登場する。矢島・四代はいずれも佐郷島周辺に位置しており、瀬戸内海における旧来の雇用圏が規模を縮小しつつも、なお維持されていたと考えられる。

もつとも、この変化を単純に経営的要因のみに帰することはで

きない。佐郷島・牛島・岩見島などでは、他漁業の展開や地域内における就業機会の増加、あるいは他鯨組への労働力の分散など、複合的な要因によって労働力供給構造が変化した可能性がある。

その結果、益富組における双海船の雇用は、田島を中核とする形で周辺地域へと再編されていったものと考えられる。その背景については地域社会側の動向も踏まえ、さらに検討する必要がある。

この推移は、西海捕鯨業の発展期には広域的な労働力供給のネットワークが形成されていた一方、衰退期には益富組の経営状況の変化や捕獲体制の再編に伴い、双海船人員の雇用構成が変容したことを示している。その過程で、網の補修にも対応し得る技術を有する田島出身者への依存度が高まるとともに、複数の鯨組を同時展開するなかで、その雇用規模も拡大していったものと考えられる。

また、益富組の中後期経営を支えた重要な別当である晝屋勢右衛門家に残された史料には、「一輦・田島 双海組出扶持宿元出船之日と渡ス、組上り七日扶持。尤田嶋前細工へ居候船ハ組出之日より組算用。一上関 室積 岩見 佐郷（佐合） 矢しま（八島） 四代 牛間（牛島） 室津。×組出宿元出船之日より上り五日扶持」とあり、前述した双海船の雇用地域が田島を中心として瀬戸内海沿岸および島嶼部に及んでいたことを裏付けている。このように益富組は田島を中核としつつ、広域にわたる雇用地域を形成していたのである。

第三章 おわりに

本稿では、安政期(一八五四～一八五九)に作成された益富組の「割」史料を翻刻し、嘉永期(一八四八～一八五三)の状況と比較することで、衰退期における労働力配置の実態を検討した。

その結果、安政期の益富組には、①組織編成の固定化、②友押の出身地の極端な地域偏在、③羽指と友押の定着性の差異、④双海船の雇用地域の変容という四つの特徴が確認された。これらは、捕鯨業経営の衰退に伴い、労働力の調達・配置のあり方が変化していたことを示している。

益富組は嘉永期までの事業拡大期において、西海地方から瀬戸内地方に至る広域的な労働力動員を基盤とし、複数の鯨組を同時に運営する「藩際捕鯨業」を展開していた。このような雇用形態は単なる労働力確保にとどまらず、地域間の社会的結び付きを強化し、捕鯨業を媒介とした人的・経済的ネットワークの形成を支えていたものと考えられる。

さらに安政期に入ると、こうした広域的な雇用圏を維持しつつも、友押の供給地は宇久島・小値賀島など特定の近隣島嶼部へ著しく集中していった。すなわち、益富組は特定地域への依存を強めることで操業に必要な労働力を安定的に確保し、衰退期における経営維持を図っていたのである。その一方で、羽指層は固定化の傾向を示しており、この組内部の技術中核層と、友押を通じて地域社会に依拠した労働力基盤とが相互に補完する雇用構造が成

立していた。

本稿の知見から示唆されるのは、この構造が近世期にとどまらず近代以降にも連続していく点である。宇久島は近代捕鯨、とりわけ南氷洋捕鯨において多数の船員・技術者を輩出した地域として知られるが、その歴史的基盤は、すでに近世後期の益富組との関係のなかで形成されていたと考えられる²²⁾。

以上のように、安政期の「割」史料は捕鯨業の衰退過程における労働力配置の変容と、その基盤となった地域社会との関係を具体的に示す重要な史料である。そこからは、衰退期において地域社会への依存を強めながら労働力配置が再編されていく過程を読み取ることができる。

最後に、今後の課題として以下の三点を指摘しておきたい。第一に、安政期に見られる労働力配置の固定化と供給地域の偏在が、捕獲効率や経営実態にいかなる影響を与えたのかについて、経営帳簿や捕獲記録との突合による検証が必要である。第二に、益富組に特有と見られる「割」制度の位置づけを明確にするため、中尾組・土肥組をはじめとする他の巨大鯨組との比較を進める必要がある。第三に、宇久島や瀬戸内海の島嶼部などの労働力供給地域に着目し、捕鯨業関連の労働が村落構造や生業体系に与えた影響を検討する必要がある。

益富組の「割」史料は、近世西海捕鯨業における労働力配置の実態を解明するうえで極めて重要な史料である。本稿の分析は、捕鯨業を支えた広域的な労働力供給と地域社会との関係を明らかに

にするとともに、近世後期における労働力動員の歴史的意義を再考する手がかりを提供する。

注記

- (1) 末田智樹（二〇〇四）『藩際捕鯨業の展開―西海捕鯨と益富組―』御茶の水書房において論じた内容については、その後、末田智樹・扇野耕多（二〇二六）『肥前国平戸藩益富家文書から見る西海捕鯨業（一）―大村藩と五島藩の漁場利用の条件―』『中部大学人文学部研究論集』第五五号においても再検討を行っている。
- (2) 末田前掲『藩際捕鯨業の展開』、とくに第五章「益富組の生産組織」を参照。
- (3) 藤本隆士（一九六四）「幕末西海捕鯨業の資金構成―生月島益富家の場合―」『福岡大学創立三十周年記念論文集 商学編』
- (4) 益富組の「割」や雇用の地域的考察については、秀村選三（一九五二）「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係（二）」九州大学『経済学研究』第十八巻第二号が先駆的研究として知られる。秀村の研究を批判的に継承しつつ、さらに具体像の解明を試みたのが末田前掲『藩際捕鯨業の展開』である。
- (5) 天保期以前における「割」史料の探索および分析は今後の課題としたい。
- (6) 注（2）と同じ。
- (7) 流番の存在については、『勇魚取絵詞』のなかで「海上二三里も漕出て鯨の形勢をうかゞふ物見舟なり」などと述べられている。『勇魚取絵詞』については、宮本常一・原口虎雄・谷川健一編（一九七〇）『日本庶民生活史料集成』第十巻所収、三一書房を参照した。『勇魚取絵詞』とは、益富組による鯨の捕獲活動を絵画と詞書によって体系的に解説した捕鯨図誌である。本書は天保三年（一八三二）に

版行され、その制作には平戸藩第九代藩主松浦清（静山）と第十代藩主松浦熙父子の関与・支援のもと、益富家三代から五代にわたる長期的な出版事業が背景にあったと考えられている。

- (8) 羽指の階層自体は、末田前掲『藩際捕鯨業の展開』二二〇～二二八頁および二四八頁の図17においてすでに指摘した。
- (9) 羽指のメンバーをはじめ、表に登場する羽指の初組出の時期・賃金・冬組と春組の役割・続柄・出身地については、秀村選三（一九九七）「幕末西海捕鯨業における益富組の労働組織の一史料」久留米大学『産業経済研究』第三八巻第三号に詳しい。なお、これらについては、末田前掲『藩際捕鯨業の展開』および本稿掲載の表との比較検討が今後の課題となる。
- (10) 秀村前掲「幕末西海捕鯨業における益富組の労働組織の一史料」。
- (11) 豊大夫については、秀村前掲「幕末西海捕鯨業における益富組の労働組織の一史料」によれば、御崎組では「二番」および「沓州四番」と記されている。
- (12) 秀村前掲「幕末西海捕鯨業における益富組の労働組織の一史料」では、太五郎・市左衛門・梶右衛門はすでに退役しているものの、「太五郎倅」「梶右衛門倅」といった記載が確認でき、続柄欄にもその関係性が見受けられる。なお、このことから、羽指には世襲的継承の傾向が見られたと考えられる。また、羽指の世襲的継承を検討するうえで、古賀康士（二〇二四）「近世日本捕鯨関係史料（一）―肥前国生月島益富組『諸願書控帳』―」同志社大学『経済学論叢』第七六巻第二・三号、三八〇～三九四頁の記載は重要な裏付けとなる。
- (13) 佐次兵衛については、秀村前掲「幕末西海捕鯨業における益富組の労働組織の一史料」によれば、御崎組では「三番」および「沓州七番」に位置づけられている。また、注（11）（12）および佐次兵衛の席次等を踏まえると、秀村が翻刻した（仮）惣組役割賃銀極「

- (益富資料A904)は、安政五・六年(一八五八・五九)頃に最終的な作成・調整がなされた史料であつたと推測される。なお、筆者も本史料を確認したところ、羽指の出身地は生月島沓部浦の出身者が多数占めていた。これは、羽指の居住地が益富組の本拠地である沓部浦に集中していたことを背景としていた可能性を示唆している。
- (14) 「久米七ノ寅左衛門」および「丹藏ノ牛右衛門」については、秀村前掲史料において、それぞれ久米七・丹藏の「悴」と記されており、親子関係を確認することができる。なお、表2には「勝藏ノ長大夫」も見られるが、同史料では「長蔵」と記されており、現時点では同一人物か否かを確定できないため、本文では引用の対象外とした。
- (15) 末田前掲『藩際捕鯨業の展開』二二九～二四六頁。
- (16) 同右。
- (17) 宇久島については、とくに末田前掲『藩際捕鯨業の展開』二三一頁の図16を参照。
- (18) 田島については、前掲『勇魚取絵詞』を参照。ここでは田島の役割が強調されている。
- (19) 末田智樹(二〇一九)「近世西日本近海における鯨組の出漁と漁場利用の変化」『歴史地理学』第六一卷第一号、八～一〇頁、とくに「V. 周防国からの双海船船頭・加子の雇用」を参照。
- (20) 同右。
- (21) 古賀康士(二〇二五)「近世日本捕鯨関係史料(三)——益富組御崎組の記録(一)——」同志社大学『経済学論叢』第七七巻第一号、八〇頁。引用にあたっては適宜本文の形式にあわせて改めた。
- (22) 宇久町郷土誌編纂委員会編(二〇〇三)『宇久町郷土誌』宇久町、四五六頁を参照。なお、宇久島と同様に五島列島の有川についても、南水洋捕鯨に従事する捕鯨船乗組員の重要な供給地であつたことが指摘されている。辻唯之(二〇一五)『五島のクジラとり物語——有川湾を舞台にして——』二二八～二二五頁を参照。

付記

本稿は、JSPS科研費・基盤研究(C)「伊勢商人の蔵書形成に関する基礎的研究」(研究代表者・岡本聡/課題番号22K00352)、および中部大学二〇二五年度・二〇二六年度特別研究費の助成を受けた研究成果の一部である。また、本稿で使用した「益富家文書」の調査に際しては、福岡市総合図書館の鈴木文氏に多大なご便宜を賜るとともに、貴重なご教示をいただいた。ここに記して深く感謝申し上げる。

凡例

- 一、本史料は、益富資料(福岡市総合図書館寄託)に含まれる史料である。資料名および資料番号については、各表の出所に示した。
- 一、翻刻にあたっては、漢字・平仮名・片仮名はとくに断りのない限り、原文通りとした。
- 一、人名の固有名詞については原史料の表記を踏襲し、旧字体については適宜新字体に改めた。
- 一、虫損等により判読不能な文字については、便宜上「□」で補った。
- 一、表は横書きで作成したため、数字表記については原史料によらず算用数字に統一した。

表 1 益富組の「割」史料一覧

	年 代	文書名	組名・割の職種	表裏紙等の備考	文書番号
1	天保 2 (1831) 年	卯冬 (仮)惣組役割帳 (■天保 2 ～万延元年春)	御崎組	別、羽、若、友、定日雇	858
2	天保 11 (1840) 年	子冬 若衆割●	勝本組、宇久島組	若	益富又左衛門正敬 1124
3	天保 12 (1841) 年	丑冬 羽指若衆割	御崎組、前目組、宇久島組	羽、若	益富氏 1127
4	弘化元 (1844) 年	辰冬 羽指若衆割	御崎組、勝本組	羽、若	天保 15、11 月 1123
5	弘化 2 (1845) 年	巳冬 羽指割	御崎組、前目組	羽、若	11 月 50
6	弘化 2 (1845) 年	巳冬 御崎組方役割下控	御崎組	別、羽、若	弘化 3 巳年(弘化 2 の誤記か) 1170
7	弘化 2 (1845) 年	巳冬 前目組〔役割別人名表〕	前目組	別、羽、若	1203
8	弘化 2 (1845) 年	巳冬 組内年々手控 (■弘化 2 ～3)	御崎組	別、羽、若	12 月 24 日 1192
9	弘化 3 (1846) 年	午春 万手控	御崎組、前目組、勝本組	別	3 月吉祥日 518
10	弘化 3 (1846) 年	午春 前目板部羽指友押割●	前目組、板部組	羽、若、友	2 月 1113
11	弘化 3 (1846) 年	午冬 御崎組若衆羽指割	御崎組	羽、若、定日雇	益富氏 1193
12	弘化 3 (1846) 年	午冬 年々組方出勤人別帳 (■弘化 3 ～万延元春)	御崎組、前目組、勝本組、津吉組、江島組、黒瀬組、板部組	別、羽、若、友、小納屋道具割	1056
13	弘化 4 (1847) 年	未春 羽指友押割	勝本組、板部組	羽、友	勝元板部 1119
14	弘化 4 (1847) 年	未冬 年々組方出張人別控	前目組	若、小納屋道具割	丁未年 10 月吉祥日 51
15	弘化 4 (1847) 年	未冬 羽指友押并定日雇部屋控	御崎組	羽、若、友	1188
16	弘化 4 (1847) 年	未冬 若衆割	前目組	若、小納屋道具割	1191
17	弘化 4 (1847) 年	未冬 御崎前目居羽指割	御崎組、前目組	羽	益富氏、大漁叶 1112
18	嘉永元 (1848) 年	申春 御崎江島若衆割	御崎組、江島組	若	1126
19	嘉永元 (1848) 年	申冬 若衆割	勝本組	若、小納屋道具割	勝本組 182
20	嘉永 2 (1849) 年	酉冬 御崎前目居友押割●	御崎組、前目組	友	益富氏、大漁叶 1187
21	嘉永 3 (1850) 年	戊秋 前細工一切手控 (■嘉永 2 ～6・安政元・4 年)	御崎組、前目組、勝本組、江島組、黒瀬組	若、友、船・網・帆割	益富氏 527
22	嘉永 3 (1850) 年	戊冬 御崎居勝本居羽指割	御崎組、勝本組	羽	11 月 16 日割 1117
23	嘉永 3 (1850) 年	戊冬 御崎若衆役割控帳	御崎組	若	664
24	嘉永 4 (1851) 年	亥冬 御崎居前目居友押割	御崎組、前目組	友	9 月 4 日割、益富正敬 1066
25	嘉永 4 (1851) 年	亥冬 御崎居前目居羽指割●	御崎組、前目組	羽	11 月 17 日割 1065
26	嘉永 4 (1851) 年	亥冬 羽指割友押割	前目組	羽、友	前目組勘定納屋 45
27	嘉永 5 (1852) 年	子春 羽指友押割●	津吉組、黒瀬組	羽、友	1120
28	嘉永 5 (1852) 年	子春 若衆割	津吉組、黒瀬組	若	1114
29	嘉永 5 (1852) 年	子秋 前細工役割	御崎組	若	8 月 170
30	嘉永 5 (1852) 年	子冬 御崎若衆役割帳	御崎組	若	11 月吉日 1046
31	嘉永 5 (1852) 年	子冬 御崎勝本居羽指割	御崎組、勝本組	羽	11 月吉祥日 1111
32	嘉永 5 (1852) 年	子冬 羽指友押并若衆役割	御崎組、勝本組、板部組	羽、若、友	725
33	嘉永 6 (1853) 年	丑春 黒瀬羽指若衆割●	黒瀬組	羽、若、友	2 月 739
34	嘉永 6 (1853) 年	丑冬 惣組羽指割●	御崎・前目組、御崎・津吉・板部組	羽	丑冬寅春、11 月 12 日割 1118
35	嘉永 6 (1853) 年	丑冬 羽指友押并若衆面附●	御崎組	羽、若、友	御崎組 48
36	嘉永 6 (1853) 年	丑冬 面附并役割帳	鮪組、上・中・下納屋	鮪組	益富白石納屋 49
37	嘉永 6 (1853) 年	丑冬 前目若衆役割	前目組	若	1201
38	嘉永 6 (1853) 年	丑冬 若衆役割	前目組	若	1283
39	安政元 (1854) 年	寅春 羽指若衆控	津吉組	羽、若、友	嘉永 7 年、津吉組 1190
40	安政元 (1854) 年	寅春 羽指若衆割	御崎組	羽、若、友	嘉永 7、御崎組 47
41	安政元 (1854) 年	寅冬 若衆役割	御崎組	若	嘉永 7 年 11 月 1050
42	安政元 (1854) 年	寅冬 流番并若衆役割	勝本組	流番、若、小納屋道具割	嘉永 7 1044
43	安政元 (1854) 年	寅冬 勝本板部若衆割	勝本組、板部組	若	1116
44	安政元 (1854) 年	寅冬 歳々羽指若衆面附 (■安政元～万延元春)	御崎組	別、羽、若、友	嘉永 7、飯富氏 526
45	安政元 (1854) 年	寅冬 御崎勝本居羽指割	御崎組、勝本組	羽	寅 11 月朔日割 1122

46	安政元 (1854) 年	寅冬	御崎若衆割	御崎組	若		1125
47	安政 2 (1855) 年	卯冬	惣組羽指割	御崎組、前目組	羽	卯 11 月 14 日割	1107
48	安政 2 (1855) 年	卯冬	羽指友押割	御崎組	羽、友	旦那様、御崎大納屋	1247
49	安政 2 (1855) 年	卯冬	御崎居前目居友押割	御崎組、前目組	友	卯 9 月 22 日割	1256-1
50	安政 2 (1855) 年	卯冬	大納屋若衆役割	御崎組	若	旦那様、御崎大納屋	1246-1
51	安政 2 (1855) 年	卯冬	若衆役割	御崎組	若		1246-2
52	安政 2 (1855) 年	卯冬	流番并若衆役割	前目組	流番、若、小納屋道具割	旦那様、畳屋彦之助	1250
53	安政 3 (1856) 年	辰春	廻り番并若衆役割	前目組	廻り番、若、小納屋道具割	旦那様、畳屋彦之助	1245
54	安政 3 (1856) 年	辰春	若衆割	御崎組	若	旦那様、畳屋門之助	1244
55	安政 3 (1856) 年	辰秋	船割	御崎組、勝本組	船割	旦那様、御崎前細工所	1253-1
56	安政 3 (1856) 年	辰冬	御崎勝本居友押割	御崎組、勝本組		8 月 24 日割	1256-7
57	安政 3 (1856) 年	辰冬	惣組羽指割	御崎組、勝本組	羽	11 月	1106
58	安政 3 (1856) 年	辰冬	羽指友押若衆割	御崎組	羽、若、友	旦那様、畳屋門之助	1249-1
59	安政年間		羽指友押割	御崎組	羽、友	旦那様、畳屋門之助	1255
60	安政 3 (1856) 年	辰冬	流番并若衆役割	勝本組	流番、若、小納屋道具割	旦那様、畳屋彦之助	1252
61	安政 4 (1857) 年	巳春	羽指友押若衆割	御崎組	羽、若、友		1249-2
62	安政 4 (1857) 年	巳秋	船割	御崎組、前目組	船割	9 月 4 日	1253-2
63	安政 4 (1857) 年	巳冬	羽指友押割	御崎組	羽、友	旦那様、畳屋門之助	1254
64	安政 4 (1857) 年	巳冬	前目羽指若衆面附并役割	前目組	羽、若、友、流番		1160
65	安政 4 (1857) 年	巳冬	惣組羽指割	御崎組、前目組	羽	11 月 17 日割	1110
66	安政 4 (1857) 年	巳冬	役割	御崎組	若		1259
67	安政 4 (1857) 年	巳冬	御崎前目友押割	御崎組、前目組	友	9 月 4 日割	1256-1
68	安政 5 (1858) 年	午春	御崎組惣人数面附	御崎組	羽、若、友		1158
69	安政 5 (1858) 年	午春	前目羽指若衆面附并役割	前目組、板部組	羽、若、友、流番	2 月	1159
70	安政 5 (1858) 年	午春	板部羽指友押并若衆割	板部組	羽、若、友	2 月	1157
71	安政 5 (1858) 年	午春	羽指若衆面附帳	前目組、板部組	羽、若		1109
72	安政 5 (1858) 年	午秋	前細工惣人数面附	御崎組、勝本組	別、若、船・網・帆割	飯富性	1194
73	安政 5 (1858) 年	午秋	船割	御崎組、勝本組	船割	9 月 12 日、御崎前細工所	1248-1
74	安政 5 (1858) 年	午冬	御崎勝本友押割	御崎組、勝本組	友	旦那様、畳屋門之助	1248-2
75	安政 5 (1858) 年	午冬	惣組羽指割	御崎組、勝本組	羽		1101
76	安政 5 (1858) 年	午冬	羽指友押若衆役割	御崎組	羽、若、友	御崎組	1248-3
77	安政 5 (1858) 年	午冬	流番并若衆役割	勝本組	流番、若	旦那様、畳屋彦之助	1251
78	安政 6 (1859) 年	未冬	御崎羽差若衆面附并役割	御崎組	別、羽、若、友		1199
79	安政 6 (1859) 年	未冬	御崎若衆割	御崎組			1121
80	万延元 (1860) 年	申春	羽指友押并若衆割控	御崎組	別、羽、若、友	安政 7	1522
81	万延元 (1860) 年	申春	江島廻り番并若衆役割	江島組	廻り番、若、小納屋道具割	安政 7	767
82	万延元 (1860) 年	申春	羽指若衆割	御崎組、江島組	羽、若、友	安政 7	1257
83	明治 2 (1869) 年	巳	友押面附帳	御崎組	友	6 月	887-3
84	明治 2 (1869) 年	巳冬	年々組方惣人数諸役割帳● (■明治 2 ～ 4)	御崎組	羽、若、友、定日雇	御崎組、益富正恵	178
85	不明	辰秋	割		別(前細工割)		1301-53-1
86	不明	辰秋	前細工割		別(前細工割)		1301-64
87	不明	巳秋	前細工割		別(前細工割)		1301-53-2
88	不明	巳秋	割		別(前細工割)		1301-53-3
89	不明	巳秋	前細工割		別(前細工割)		1301-53-4
90	文政 2 ～ 安政 6 年		(仮)惣組役割賃銀極帳	御崎組、沓州組、鮪組	別、羽、若、諸職人		904
91	不明	不明	10 月 13 日割		若		1049

出所) 秀村選三・藤本隆士・武野要子・松下志朗 (1965) 『益富家文書目録——連番号整理 (その 1) ——』、『福岡市総合図書館古文書資料収蔵品データベース 益富資料』および表中に掲げた各資料より作成。

備考) 別・別当、若・若衆、羽・羽指、友・友押のこと。■は、複数年分の記録を含む「割」史料を示す。●は、末田智樹 (2004) 『藩際浦鯨業の展開—西海浦鯨と益富組—』御茶の水書房において、各史料の内容を表として示しているの、参照されたい。(59) の史料は年代不明であるが、記載された羽指・友押名が (58) と一致するため、(58) の後に配置した。

表2 安政元年（1854）益富御崎冬組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押名	友押の出身地
勢子	梶右衛門 鷺右衛門 豊大夫 卯右衛門 宇三郎 浅次郎（大） 鱧藏 紋大夫 金大夫 竹三郎 太平治 勝藏 市作 丹吾 寅之助	初五郎 吉太郎 斎次郎 千次郎 権八 亀吉 甚松 七藏 惣吉 紋作 熊藏 左平 茂三郎 市藏 若衆出合	宇久 小値賀 小値賀 館 小値賀 宇久平 宇久下山 宇久長野 宇久飯良 宇久下山新 宇久神浦 宇久小浜 宇久平 宇久飯良
勢子持双	弥太郎 伝藏	仁八 惣右衛門	瀬戸 壺部
本持双	芳太 伴藏	三太郎 長大夫	小値賀 宇久
増羽指	伝五 与市（館）		
双海附	郷大夫 太治郎 丹藏 卯太郎 密大夫 太郎助	藤七 金兵衛 柘植藏 助七 長藏 音作	外海神浦 外海神浦 宇久平新 宇久平 宇久小浜 館
増加子	久米七ノ寅左衛門 勝藏ノ長大夫 丹藏ノ牛右衛門		
小八丁乗	久米七		

出所）「嘉永7寅冬 歳々羽指若衆面附 飯富氏」（益富資料526）より作成。

備考）本表は、該当史料の「嘉永7寅冬羽指友押割」と記された箇所をもとに作成した。羽指名の括弧内は、史料記載の出身地を示す。友押名およびその出身地が未記入の場合、史料では空白となっている。本表以下の文言表記は、原則として史料通りとした。ただし、友押の出身地における「同所」については、前出の地名を補記した。なお、これらの点については、以下の表では同一内容の場合、省略した。

表3 安政2年（1855）益富御崎春組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押名	友押の出身地
勢子	梶右衛門 鷺右衛門 豊大夫 卯右衛門 宇三郎 浅次郎（大） 鱈藏 紋大夫 金大夫 竹三郎 太平治 市作 伝吾	初五郎 吉太郎 斎次郎 仙治郎 権八 亀吉 甚松 七藏 惣吉 茂三郎 弥三右衛門 熊藏	宇久平 小値賀斑 小値賀斑 館 小値賀黒島 宇久平 宇久下山 宇久長野 宇久飯良 宇久平 壺州 宇久神浦
勢子持双	弥太郎 伝藏（館）	仁八 惣右衛門	瀬戸 壺部
本持双	芳太 伴藏	三太郎 長大夫	小値賀 宇久平
増羽指	与市（館）		
双海附	郷大夫 太治郎 丹藏 密大夫	藤七 金兵衛 音作 助七	神浦 神浦 館 宇久平
増加子	久米七ノ寅左衛門 勝藏ノ長大夫 丹藏ノ牛右衛門		
小八丁乗	久米七		

出所）表2と同一史料より作成。

備考）本表は、該当史料の「卯春羽指友押割」と記された箇所をもとに作成した。

表 4 安政 2 年（1855）益富御崎冬組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢 子	梶右衛門 鷺右衛門 豊大夫 佐次兵衛 三 蔵 鱧 蔵 紋大夫 金大夫 太平治 勝 蔵 左次右衛門 斎次郎 虎之助 鉄 蔵 伝 蔵	作 蔵 甚 松 権 八 吉 蔵 七 蔵 吉太郎 左 平 紋 治 茂三郎 三 吉 藤 助 虎 助 権次郎 彦右衛門 斎次郎	宇久下山 宇久下山 小値賀 宇久平 宇久長野 小値賀 宇久小浜 宇久神浦 宇久平 宇久蒲浦 宇久神浦 宇久飯良 宇久下山 宇久長野 小値賀
勢子持双	太郎市 芳 太	和 吉 三太郎	瀬 戸 小値賀
本持双	原太郎 伝 吾	惣右衛門 茂 市	壺 部 宇久平
増羽指	留大夫（春勢子） 与 市 虎次郎（当年方） 虎左衛門（同断）		
双海附	卯三郎 権大夫 丹 蔵 馬左衛門 卯太郎 太郎助	平 七 又五郎 長 蔵 音 吉 三 六 助 七	外海神浦 外海神浦 宇久小浜 宇 久 小値賀 宇 久
増加子	勝蔵ノ長大夫 丹蔵ノ牛右衛門		
小八丁乗	久米七		
双 海		五郎吉 岩 平 儀 助 兼 松 仁 助 五郎右衛門	田 島 田 島 矢 島 四 代 四 代 四 代
網大工		為 吉	

出所）「卯冬羽指友押割」（益富資料 1247）より作成。

備考）双海の仁助および五郎右衛門の名の後には、「メ此内式艘舳板部下り未名前不相分」と記されている。

表5 安政3年（1856）益富御崎春組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢子	梶右衛門 鷺右衛門 豊大夫 佐次兵衛 三 蔵 鱈 蔵 紋大夫 太平次 勝 蔵 寅之助 伝 蔵 留大夫	作 蔵 甚 松 権 八 吉 蔵 七 蔵 吉太郎 寅 吉 茂三郎 三 吉 藤 助 斎次郎 三 六	宇久下山 宇久下山 小値賀 宇久平 宇久平 小値賀 宇久神浦 宇久平 宇久蒲浦 宇久蒲浦 小値賀 小値賀
勢子持双	太郎一 芳 太	和 吉 三太郎	瀬 戸 小値賀
本持双	原太郎 伝 五	惣右衛門 茂 一	壱 部 宇久平
増羽指	与 市（館） 寅次郎 寅左衛門		
双海附	卯三郎 権大夫 馬左衛門 太郎助	平 七 又五郎 権次郎 助 七	外海神浦 外海神浦 宇久下山 宇久下山
増加子	勝蔵ノ長大夫 丹蔵ノ牛右衛門		
小八丁乗	久米七		
双 海		五郎吉 岩 平 儀 助 仁 助	田 島 田 島 矢 島 四 代

出所）表2と同一史料より作成。

備考）本表は、該当史料の「辰春羽指友割」（原文通り、「友押」の「押」の脱字か）と記された箇所をもとに作成した。

表6 安政3年（1856）益富御崎冬組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢子	太五郎 鷺右衛門 豊大夫 佐次兵衛 三 蔵 藤 作 紋大夫 金大夫 与大夫（館） 勝 蔵 竹三郎 左次右衛門 斎次郎 鉄 蔵 伝 蔵（館）	十大夫 作次郎 谷五郎 金四郎 惣 吉 作 蔵 初五郎 甚 松 弥 市 三 六 権 八 熊 蔵 卯 吉 吉太郎 斎次郎	江ノ串 川 棚 小 串 宇久平 宇久飯良 宇久下山 宇久平 宇久下山 宇久小浜 小値賀笛吹 小値賀黒島 宇久神浦 宇久神浦 小値賀斑 小値賀斑
勢子持双	太郎市 芳 太	作太郎 五 市	松 原 瀬 戸
本持双	原太郎 伝 吾	三太郎 留 蔵	小値賀笛吹 宇久平
増羽指	留大夫（春勢子） 与 市（館） 寅次郎		
双海附	卯三郎 権大夫 丹 蔵 馬左衛門 卯太郎 太郎助	金兵衛 藤 七 吉 蔵 藤 八 久 七 善太郎	神 浦 神 浦 宇久下山 小値賀前方 宇久平 宇久平
増加子	鱈 蔵ノ音次郎 金大夫ノ彦次郎（新） 豊大夫ノ市 蔵（新）		
小八丁乗	久米七		
双 海		五郎吉 千 吉 十五郎 新次郎 銀 松 卯三郎	田 島 田 島 矢 島 矢 島 矢 島 四 代
網大工		八郎治	

出所）「辰冬羽指友押若衆割」（益富資料 1249-1）より作成。

備考）友押の「初五郎」「弥市」「卯吉」の3名には白丸（○）が付されているが、その意味は不明である。双海の「銀松」「卯三郎」には白四角印（□）が付されており、その末尾には「□印春板部直り」との記載が見られる。また、「新」は新規雇用を示すものと推察されるため、本表では（新）と表記した。なお、本史料では「惣海附」と記載され、「惣」の字が使用されている。同様の表記は他の表にも見られるが、煩雑を避けるため、注記は本表のみに留めた。

表7 安政4年（1857）益富御崎春組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢子	太五郎 鷺右衛門 豊大夫 佐次兵衛 三 蔵 藤 作 紋大夫 金大夫 与大夫（館） 勝 蔵 左次右衛門 留大夫	十大夫 作次郎 谷五郎 金四郎 宗 吉 作 蔵 熊 蔵 甚 松 権 八 三 六 吉太郎 斎次郎	江ノ串 川 棚 小 串 宇久平 宇久飯良 宇久下山 宇久神浦 宇久下山 小値賀黒島 小値賀笛吹 小値賀斑 小値賀斑
勢子持双	太郎一 芳 太	作太郎 五 市	松 原 瀬 戸
本持双	原太郎 伝 吾	三太郎 留 蔵	小値賀 宇久平
増羽指	与 市（館） 寅次郎		
双海附	卯三郎 権大夫 卯太郎 熊次郎	金兵衛 藤 七 吉 蔵 久 七	神 浦 神 浦 宇久下山 宇久平
増加子	鱈 蔵ノ音次郎 金大夫ノ彦次郎 豊大夫ノ市 蔵		
小八丁乗	久米七		
双 海		五郎吉 千 吉 重治郎 新治郎	田 島 田 島 矢 島 矢 島
網大工		八郎治	

出所）「安政4 巳夏 羽指友押若衆割」（益富資料 1249-2）より作成。ただし、「双海」および「網大工」の部分については、表2 と同一史料を用いて作成。

備考）久米七の次に「惣海」とあるが、名前部分は空白となっている。夏の割であったため、未だ決定していなかった可能性がある。

表 8 安政 4 年（1857）益富御崎冬組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢 子	鷲右衛門 豊大夫 佐次兵衛 浅次郎 鱈 蔵 紋大夫 与大夫（館） 竹三郎 牛 蔵 左次右衛門 斎次郎 鉄 蔵 伝 蔵 権四郎 三 蔵	元右衛門 金四郎 又 吉 三 六 初五郎 亀 吉 寅 吉 新兵衛 権 八 紋次郎 幾次郎 吉太郎 馬 蔵 太三郎 三 蔵	松 原 宇久平 小 串 小値賀笛吹 宇久平 宇久平 宇久下山 宇久蒲浦 小値賀黒島 宇久蒲浦 宇久平 小値賀寺島 宇久蒲浦 川 棚 宇 久
勢子持双	芳 太 原太郎	松太郎 和 吉	松 原 瀬 戸
本持双	伝 吾 与 市	仁 蔵 三太郎	壱 州 小値賀笛吹
増羽指	留大夫（春勢子） 寅次郎 牛右衛門 音次郎（新）		
双海附	梶右衛門 卯三郎 丹 蔵 太郎助 斎 吉（新） 徳次郎（新）	又五郎 平 七 左 平 五 郎 幸之助 伴 蔵	神 浦 神 浦 宇久小浜 宇久蒲浦 宇久飯良 壱 州
増加子	金大夫ノ彦次郎 豊大夫ノ市 蔵 三 蔵ノ寅次郎（新）		
小八丁乗	久米七		
双 海		五郎吉 久 吉 左 七 清 吉 兼 松 五郎右衛門	田 島 田 島 鞆 鞆 四 代

出所）「安政 4〔年〕 11 月 巳冬羽指友押割 御寄組」（益富資料 1254）および表 2 と同一史料より作成。

表9 安政5年（1858）益富御崎春組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢子	鷲右衛門 豊大夫 佐次兵衛 浅次郎（的） 鱈蔵 紋大夫 与大夫（館） 竹三郎 牛蔵 斎次郎 鉄蔵 留大夫	元右衛門 金四郎 又吉 三六 初五郎 亀吉 寅吉 新兵衛 権八 馬蔵 吉太郎 太三郎	松原 宇久平 小串 小値賀笛吹 宇久平 宇久平 宇久下山 宇久蒲浦 小値賀黒島 宇久蒲浦 小値賀寺島 川棚
勢子持双	芳太 原太郎	松太郎 和吉	松原 瀬戸
本持双	伝五 与市（館）	仁蔵 三太郎	壺州 小値賀笛吹
増羽指	寅次郎 牛右衛門 音次郎		
双海附	梶右衛門 宇三郎 太郎助 斎吉 熊大夫 辰五郎	又五郎 平七 五市 柘植蔵 善太郎 伴蔵	神浦 神浦 宇久蒲浦 同所前目と直り 同所前目と直り 一州
増加子	金大夫ノ彦次郎 豊大夫ノ市蔵 三蔵ノ寅次郎		
小八丁乗	久米七		
双海		五郎吉 久吉 清吉 兼松 勘太郎 初五郎	田島 田島 鞆代 四代 四代 宇久

出所）「午春御崎組惣人数面附」（益富資料 1158）および表2と同一史料より作成。

備考）「柘植蔵」および「善太郎」の「同所前目と直り」は原文通り掲載した。「双海」の部分は、本史料では「双海船頭」と表記されている。「勘太郎」および「初五郎」については「壺州直り」と記されている。

表 10 安政 5 年（1858）益富御崎冬組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押名	友押の出身地
勢 子	鷲右衛門 豊大夫 左次兵衛 浅次郎（大） 鱈 蔵 紋大夫 与大夫（館） 牛 蔵 斎次郎 鉄 蔵 弥太郎 伝 蔵（館） 権四郎 三 蔵 芳 太 大 蔵	三 六 又五郎 金 七 久 太 熊 吉 吉 蔵 権 八 千 蔵 亀 吉 弥五郎 作 蔵 虎 吉 幾次郎 甚 松 千 吉 七 蔵	小値賀笛吹 千 綿 川 棚 小値賀寺島 宇久神浦 宇久平 小値賀 宇久蒲浦 宇久平 音 琴 宇久下山 宇久飯良 宇久平 宇久下山 宇久下山 宇久長野
勢子持双	虎 蔵 利 八	藤次郎 久大夫	松 原 瀬 戸
本持双	伝 吾 与 市	千 太 仁 蔵	宇久平 壺 州
増羽指	留大夫 虎次郎 熊次郎 牛右衛門 音次郎		
双海附	勝大夫 卯三郎 三 蔵 太郎助 熊大夫 徳次郎	金兵衛 初五郎 喜 平 音 吉 重 作 柘植蔵	神 浦 宇久下山 宇久飯良 宇久平 壺 州 宇久平
増加子	豊大夫ノ市 蔵 三 蔵ノ虎次郎 三 蔵ノ左助（新） 伝次右衛門ノ芳蔵（新）		
小八丁乗	吉次郎		

出所）「安政 5〔年〕午冬羽指友押若衆役割」（益富資料 1248-3）および表 2 と同一史料より作成。

表 11 安政 6 年（1859）益富御崎冬組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢 子	伝次右衛門 寅大夫 八大夫 清 藏 佐次兵衛 浅次郎（大） 政次郎 鱈 藏 紋大夫 太郎像 太平次 与大夫（館） 勝 藏 竹三郎 丹 藏 宗兵衛 鉄 藏	甚 助 金四郎 与次郎 和 平 権 八 紋次郎 七 藏 亀 吉 仙 藏 幸 作 庄 藏 寅 吉 熊 吉 三 六 弥 平 久太郎 善五郎	宇久平 宇久平 宇久神浦 宇久下山 小値賀 宇久神浦 宇久長野 宇久平 宇久神浦 宇久下山 宇久下山 宇久飯良 宇久神浦 小値賀 宇久小浜 宇久寺島 宇久寺島
勢子持双	弥太郎 伝 藏（館）	寅 藏 留大夫	出 合 出 合
本持双	権四郎 三 藏	辰 藏 仙 太	宇久平 宇久浜
増羽指	太郎市 国 藏 大 藏 辰次郎		
双海附	善 吉 権大夫 卯三郎 三 藏 喜 市 熊次郎	要 助 初五郎 幾次郎 五 郎 左 平 喜太郎	宇久平 宇久下山 宇久平 宇久蒲浦 宇久小浜 宇久平
増加子	宇太郎ノ幾太郎 太郎藏ノ弥之助 三 藏ノ寅次郎 善 吉ノ亀太郎 三 藏ノ左 助 伝次右衛門ノ芳 藏		
双 海		勇 平 為 吉 惣 吉 五郎吉 久 吉 左 吉	田 島 田 島 田 島 田 島 田 島 田 島
網大工		八郎治	

出所）「安政 6 年未冬 御崎羽差若衆面附并役割」（益富資料 1199）および表 2 と同一史料より作成。
備考）「出合」については、表 2 と同一の史料では「羽指出合」と記されている。

表 12 安政 7 年（1860）益富御崎春組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢 子	虎大夫 八大夫 佐次兵衛 鱈 藏 太郎藏 与大夫（館） 竹三郎 丹 吾 鉄 藏 伝 藏（館） 太郎一 留大夫 源太郎	金四郎 与次郎 権 八 亀 吉 幸 作 紋次郎 乙 作 和 平 庄 藏 七 藏 弥 平 三 六 久太郎	宇久平 宇久神浦 小値賀 宇久平 宇久下山 宇久神浦 館 宇久下山 宇久下山 宇久長野 宇久小浜 小値賀 宇久寺島
勢子持双	利 八 伝 吾	又五郎 千 太	宇 久 宇 久
本持双	豊 吉 三 六	辰 藏 力 藏	宇 久 沓 部
増羽指	虎次郎 寅左衛門 音次郎 与 八		
双海附	善 吉 卯三郎 太兵衛 熊次郎	要 助 幾次郎 五 郎 善五郎（冬勢子方）	宇久平 宇久平 宇久神浦 宇久神浦
増加子	太郎藏ノ弥之助 三 藏ノ寅次郎 伝次右衛門ノ芳 藏		
小八丁乗	国 藏		
双 海		為 吉 久 吉 佐 七 初五郎	田 島 田 島 鞆 宇久冬付方
網大工		八郎治	

出所）「申春羽指友押并若衆割控」（益富資料 1522）および表 2 と同一史料より作成。

表 13 安政 2 年（1855）益富前目・御崎冬組の友押割

所在地	平戸藩壱岐前目浦		平戸藩生月島御崎浦	
職種・鯨船名	友押名	出身地	友押名	出身地
勢 子	初五郎 卯 吉 長 八 紋次郎 新兵衛 宗 吉 幸之助 仙 藏 藤 平 金次郎 亀 吉 弥 市 権次郎 善 藏 芳之丞	宇久平 宇久神浦 宇久神浦 宇久神浦 宇久蒲浦 宇久飯良 宇久蒲浦 宇久蒲浦 宇久小浜 宇久平 宇久平 宇久小浜 宇久下山 板 部（新） 板 部（新） 壱 州 壱 州 壱 州	作 藏 吉太郎 虎 吉 権 八 斎次郎 藤 助 紋 治 芳次郎 三 吉 佐 平 甚 松 吉 藏 茂三郎 彦右衛門 七 藏	宇久下山 小値賀 宇久飯良 小値賀 小値賀 宇久神浦 宇久神浦 宇 久（新） 宇久蒲浦 宇久小浜 宇久下山 宇久平 宇久平 宇久長野 宇久長野
持 双	仁 八 五 市 留 藏 千 藏 辰 藏 米 藏	瀬 戸 瀬 戸 宇久平 宇久平 宇久平 宇久平 壱 州 壱 州	和 吉 惣右衛門 三太郎 茂 市	瀬 戸 壱 部 小値賀 宇久平
双海附	金兵衛 藤 七 芳 藏 市兵衛 喜太郎 吉 藏 利 助 市 藏	神 浦 神 浦 板 部 板 部 宇久平 宇久下山 宇久神浦村 宇久飯良	平 七 又五郎 助 七 音 吉 長 藏 三 六	神 浦 神 浦 宇 久 宇 久 宇久小浜 小値賀（新）
双 海	柘植藏 虎 吉	宇久平 宇久下山		

出所)「卯冬御崎居前目居友押割」(益富資料 1256-4)より作成。

備考) 本史料には「9月22日割」とある。出身地に「壱州」とある5名は友押名が空白となっている。瀬戸組の「持双」は史料上「時双」と記されているが、御崎組との比較から「持双」とした。また、「双海」については、本史料では「双海乗」と表記されており、その最後には「メ春勢子二成候」との記載がある。「利助」の部分には「神浦村」とあり、「村」の字が付されている。なお、これ以前の表にも見られたが、(新)と示した部分は新規雇用を意味するものと考えられる。

表 14 安政 3 年（1856）益富御崎・勝本冬組の友押割

所在地	平戸藩生月島御崎浦		平戸藩壱岐勝本浦	
職種・鯨船名	友押名	出身地	友押名	出身地
勢 子	十大夫 金 七 善五郎 初五郎 甚 松 作 藏 弥 市 熊 藏 卯 吉 宗 吉 斎次郎 吉太郎 権 八 三 六 金四郎	江野串 川 棚 小 串 宇久平 宇久下山 宇久下山 宇久小浜 宇久神浦 宇久神浦 宇久飯良 小値賀斑 小値賀斑 小値賀黒島 小値賀笛吹 宇久平	仁大夫 権右衛門 作次郎 平 七 又五郎 十左衛門 亀 吉 茂三郎 吉 藏 千 藏 寅 吉 新兵衛 藤 平 七 藏 藤 助 紋次郎 馬 藏 寅 吉	千 綿 川 棚 川 棚 川 棚 小 串 千 綿 宇久平 宇久平 宇久平 宇久蒲浦 宇久下山 宇久蒲浦 宇久小浜 宇久長野 宇久神浦 宇久神浦 宇久神浦 宇久飯良
持 双	五 市 留 藏 三太郎 作太郎	瀬 戸 宇久平 小値賀笛吹 松 原	四方太郎 和 吉 久大夫 千太郎 辰 藏 仁 藏	壱州小崎 瀬 戸 瀬 戸 宇久平 宇久平 壱州小崎
双海附	金兵衛 藤 七 藤 八 久 七 吉 藏 喜太郎	瀬戸神浦 瀬戸神浦 小値賀前方 宇久平 宇久下山 宇久平	平 七 又五郎 長 藏 五 郎 柘植藏 権次郎 三 吉 佐 平 幸之助 九之助	神 浦 神 浦 宇久小浜 宇久蒲浦 宇久蒲浦 宇久下山 宇久蒲浦 宇久小浜 宇久飯良 宇久飯良

出所)「辰冬御崎勝本居友押割」(益富資料 1256-7) より作成。

備考) 本史料には「8 月 24 日割」とある。

表 15 安政 4 年（1857）益富御崎・前目冬組の友押割

所在地	平戸藩生月島御崎浦		平戸藩壱岐前目浦	
職種・鯨船名	友押名	出身地	友押名	出身地
勢 子	又五郎 元右衛門 金四郎 権 八 吉太郎 三 六 初五郎 亀 吉 新兵衛 紋次郎 寅 吉 馬 藏 三 藏 幾次郎	小 串 川 棚（新） 松 原 宇久平 小値賀黒島 小値賀寺島 小値賀笛吹 宇久平 宇久平 宇久蒲浦 宇久蒲浦 宇久下山 宇久神浦 宇久神浦 宇久平	善五郎 甚 吉 弥五郎 又五郎 千 藏 甚 松 作 藏 藤 平 弥 市 幾 平 熊 吉 吉 藏 寅 吉 七 藏 吉 藏 宗 吉	小 串 小 口 川 棚（新） 川 棚（新） 音 琴 千 綿（新） 宇久蒲浦 宇久下山 宇久下山 宇久小浜 宇久小浜 宇久神浦新 宇久神浦新 宇久下山 宇久飯良 宇久長野 宇久平 宇久飯良
持 双	久大夫 三太郎	松 原（新） 瀬戸前目居二成候 小値賀笛吹 壱 州	五 市 和 吉 留 藏 千 太 辰 藏	松 原（新） 瀬 戸 瀬戸御崎居成候 宇久平 宇久平 宇久平
双海附	平 七 又五郎 佐 平 五 郎 幸之助	神 浦 神 浦 宇久小浜 宇久蒲浦 宇久飯良 壱 州	金兵衛 藤 七 喜太郎 音 吉 柘植藏 初五郎 三 吉 太 助 熊 吉 喜 平	神 浦 神 浦 宇久平 宇久平 宇久平 宇久下山 宇久蒲浦 宇久小浜 宇久小浜 宇久飯良（新）

出所）「巳冬御崎前目友押割」（益富資料 1256-1）より作成。

備考）本史料には「9 月 4 日割」とある。友押名が未記入の場合、史料では空白となっている。

表 16 安政 5 年（1858）益富御崎・勝本冬組の友押割

所在地	平戸藩生月島御崎浦		平戸藩壱岐勝本浦	
職種・鯨船名	友押名	出身地	友押名	出身地
勢 子	弥五郎 又五郎 金 七 三 六 権 八 久 太 熊 吉 寅 吉 千 藏 作 藏 甚 松 吉 藏 千 吉 亀 吉 七 藏 幾次郎	音 琴 千 綿 川 棚 小値賀笛吹 小値賀笛吹 小値賀寺島 宇久神浦 宇久飯良 宇久蒲浦 宇久下山 宇久下山 宇久平 宇久下山 宇久平 宇久長野 宇久平	又五郎 津和次郎 三大夫 千 助 貞右衛門 寅 吉 金四郎 甚 助 宗 吉 弥 市 馬 藏 新兵衛 紋次郎 与次郎 源 藏	小 串 川 棚（新） 千 綿 松 原 江 串（新） 伊 浦（新） 宇久下山 宇久平 宇久平 宇久飯良 宇久小浜 宇久神浦 宇久蒲浦 宇久蒲浦 宇久神浦（新） 宇久神浦（新） 壱 州（新） 壱 州（新）
持 双	藤次郎 久大夫 千 太 仁 藏	松 原 瀬 戸 宇久平 壱 州	彦 三 和 吉 元 吉 辰 藏 留 藏 儀三郎	瀬 戸 瀬 戸 松 原（新） 宇久平 宇久平 宇久平
双海附	金兵衛 初五郎 柘植藏 音 吉 喜 平 伴 藏	神 浦 宇久下山 宇久平 宇久平 宇久飯良 壱 州	平 七 喜太郎 茂三郎 源次郎 左 平 多 助 熊 藏 五 郎 三 吉 幸之助	神 浦 宇久平 宇久平 宇久平 宇久小浜 宇久小浜 宇久小浜 宇久蒲浦 宇久蒲浦 宇久飯良

出所)「午冬御崎勝本友押割」(益富資料 1248-2)より作成。

備考) 本史料には「9月22日割」とある。小値賀寺島については「同所寺島」と記されている。

表 17 安政4年（1857）益富前目冬組の羽指友押割

所在地	平戸藩吉岐		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢子	伝次右衛門 寅大夫 八大夫 惣大夫 清蔵 芳五郎 三蔵 政治郎 藤作 磯大夫 金大夫 太郎蔵 太平次 勝蔵 丹吾 惣兵衛 弥太郎 太郎一	金七郎 弥五郎 熊吉蔵 万甚松 又五郎 千五郎 千蔵 作吉蔵 寅吉蔵 吉藤平 惣吉市 弥吉市 甚吉市 千吉蔵 七郎平 作治郎 幾平	川棚 音琴 宇久神浦 小串山 宇久下山 千綿 宇久浦浦 宇久下山 宇久飯良 宇久平 宇久小浜 宇久飯良 宇久小浜 小口山 宇久長野 川棚 宇久
勢子持双	大蔵 太辰郎 寅蔵	久大夫 藤次郎 千太郎 五市	瀬戸 松原 宇久平 瀬戸
本持双	判蔵 利八市 彦吉 豊	留蔵 辰蔵	宇久平 宇久平
増羽指	吉次郎（春勢子） 三六 熊次郎 寅左衛門 沢蔵 長大夫 作次郎（新） 徳蔵（新） 兼作（小新） 甚作（小新）		
双海附	善吉（名） 久大夫 権大夫 亀之助 太兵衛 喜市蔵 国市蔵 久密蔵 熊大夫（新）	金平 藤七蔵 熊介吉 太音吉 初五郎 喜太郎 三吉蔵 柘植蔵 喜平	神浦 神浦 宇久小浜 宇久小浜 十川山 宇久下山 宇久平 宇久浦浦 宇久平 宇久飯良
増加子	紋大夫ノ八治郎 亀之助ノ松次郎 太平次ノ与八 卯右衛門ノ幾太郎 太郎蔵ノ弥之助（新） 豊次郎ノ作蔵（新）		
双海		惣吉 初五郎 栄次郎 千吉 与吉 勇吉 初五郎 勘太郎 岩平 卯三郎	田島 四代 矢島 田島 田島 矢久島 矢島 田島 四代

出所）「安政4年巳冬 前目羽指若衆面附并役割」（益富資料 1160）より作成。

表 18 安政 5 年（1858）益富板部春組の羽指友押割

所在地	五島藩板部		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢 子	伝次右衛門 八大夫 清 藏 三 藏 藤 作 金大夫 太平次 丹 吾 佐次右衛門 弥太郎 伝 藏 権四郎 吉 松 吉次郎	金 七 熊 藏 甚 松 千 藏 寅 藏 千 吉 弥 市 紋次郎 幾次郎 七 藏 三 八 吉 藏 幾 平 作次郎	川 棚 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 川 棚
勢子持双	辰次郎 寅 藏	千太郎 藤次郎	宇 久 松 原
本持双	利 八 豊 吉	留 藏 辰 藏	宇久平 宇久平
増羽指	熊次郎 沢 藏 長大夫 作次郎		
双海附	善 吉 権大夫 太兵衛 丹 藏 久 市 徳次郎	金 平 左 平 熊 藏 音 吉 喜 平 幸之助	神 浦 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久
増加子	亀之助ノ松次郎 太平次ノ与 八 豊次郎ノ作 藏		
双 海		与 吉 千 吉 勇 吉 栄次郎 左 七 五郎右衛門	田 島 田 島 矢 島 矢 島 頼 代 四 代

出所）「安政 5〔年〕 2 月 午春板部羽指友押并若衆割」（益富資料 1157）より作成。

備考）「双海」については、本史料では「双海割」と記されている。

表 19 安政 5 年（1858）益富前目・板部春組の羽指友押割

所在地	平戸藩老岐前目浦			五島藩板部		
職種・鯨船名	羽指名	友押(船頭)名	友押の出身地	羽指名	友押(船頭)名	友押の出身地
勢 子	寅大夫 惣大夫 芳五郎 政治郎 磯大夫 太郎藏 勝 藏 惣兵衛 太郎一 国 藏 大密 藏	弥五郎 万 藏 又五郎 八十右衛門 貞 藏 藤 平 病氣にて不参 甚 吉 惣 吉 作 藏 熊右衛門 龜三郎	音 琴 小 串 千 綿 渡 良 瀬 戸 宇久小浜 小 口 宇久飯良 宇 久 沖 島 渡 良	伝次右衛門 八大夫 清 藏 三 藏 藤 作 金大夫 太平次 丹 吾 弥太郎 吉次郎	金 七 熊 藏 甚 松 千 藏 寅 吉 吉 藏 弥 市 千 吉 七 藏 作治郎 幾 平	川 棚 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 宇 久 川 棚 宇 久
勢子持双	太 郎 伴 藏	久大夫 五 市	瀬 戸 瀬 戸	辰次郎 虎 藏	藤次郎 千太郎	松 原 宇 久
本持双	彦 市 兼 作	種 藏 寅 平	渡 良 渡 良	利 八 豊 吉	留 藏 辰 藏	宇 久 宇 久
増羽指	三 六 甚 作			熊次郎 沢 藏 長大夫 作次郎		
双海附	久大夫 亀之助 喜 市 虎左衛門 熊大夫 徳次郎	藤 七 太 助 三 吉 重 藏 喜太郎 柘植藏	川 棚 宇 久 宇 久 飯 良 宇 久 宇 久	善 吉 権大夫 太兵衛 久 市	金 平 熊 藏 音 吉 喜 平	宇 久 宇 久 宇 久
増加子	紋大夫ノ八次郎 太郎藏ノ弥之助 卯右衛門ノ幾太郎			亀之助ノ松次郎 太平次ノ与 八 豊次郎ノ作 藏		

出所)「安政 5 年 2 月 午春前目羽指若衆面附并役割」(益富資料 1159) より作成。

表 21 安政 2 年（1855）益富御崎・前目冬組の羽指割

所在地	平戸藩生月島	平戸藩杓岐
職種・鯨船名	羽指名	羽指名
勢 子	梶右衛門 鷺右衛門 豊大夫 左次兵衛 三 藏 鱈 藏 紋大夫 金大夫 太平次 勝 藏 左次右衛門 斎次郎 虎之助 鉄 藏 伝 藏（館）	太五郎 勝大夫 徳 藏 虎大夫 八大夫 惣大夫 久大夫（名） 清 藏 芳五郎 浅次郎（大） 政次郎 藤 作 磯大夫 太郎蔵 与大夫（館） 牛 藏 丹 吾 惣兵衛 弥太郎 権四郎
勢子持双	太郎一 芳 太	三 藏 大 蔵 太 郎 辰次郎
本持双	原太郎 伝 吾	虎 藏 伴 蔵 利 八 彦 一
増羽指	留大夫（春勢子） 与 市（館） 寅次郎（新） 虎左衛門（新）	吉次郎（春勢子） 豊 吉 密 蔵（名） 三 六 熊次郎（新）
双海附	卯三郎 権大夫 丹 蔵 馬左衛門 卯太郎 太郎助	善 吉 卯右衛門 太次郎 亀之助 太兵衛 竹三郎 密大夫 喜 市 久 市 国 蔵
増加子	勝 藏ノ長大夫 丹 藏ノ牛右衛門	政次郎ノ作次郎 熊治郎ノ沢 蔵 鱈 藏ノ音次郎（新） 辰左衛門ノ徳次郎（新）
小八丁乗	久米七	

出所）「安政 2〔年〕 11 月 卯冬惣組羽指割」（益富資料 1107）より作成。

備考）本史料には「卯 11 月 14 日割」とある。

表 20 安政元年（1854）益富御崎・勝本冬組の羽指割

所在地	平戸藩生月島	平戸藩杓岐
職種・鯨船名	羽指名	羽指名
勢 子	梶右衛門 鷺右衛門 豊大夫 卯右衛門 卯三郎 浅次郎（大） 鱈 藏 紋大夫 金大夫 竹三郎 太平次 勝 蔵 市 作 丹 作 虎之助	太五郎 勝大夫 徳 蔵 寅大夫 八大夫 惣大夫（名） 久大夫（名） 清 蔵 左次兵衛 三 蔵 芳五郎 作大夫 政次郎 藤 作 磯大夫 太郎蔵 与大夫（館） 牛 藏 左次右衛門 才次郎 惣兵衛 鉄 蔵
勢子持双	弥太郎 伝 蔵（館）	小 伝 権四郎 三 蔵 太郎一
本持双	芳 太 伴 蔵	大 蔵 太 郎 辰次郎 彦 蔵
増羽指	伝 吾 与 市（館）	留大夫 吉次郎 市 蔵 彦 蔵（名） 密 蔵
双海附	郷大夫 太次郎 丹 蔵 卯太郎 密大夫 太郎助	善 吉 権大夫 亀之助 太兵衛 馬左衛門 喜 市 久 市 国 蔵 原太郎 利 八
増加子	久米七ノ寅左衛門 勝 蔵ノ長大夫 丹 蔵ノ牛右衛門	清 蔵ノ三 六 権大夫ノ寅次郎 磯大夫ノ熊次郎 政次郎ノ作次郎 熊次郎ノ沢 蔵
小八丁乗	久米七	
出 会		吉次郎 留大夫 大 蔵 太 郎 辰次郎 虎 蔵 原太郎 利 八 彦 蔵 密 蔵（名） 国 蔵 久 蔵 市 蔵

出所）「寅冬御崎勝本居羽指割」（益富資料 1122）より作成。

備考）本史料には「寅 11 月朔日割」とある。また、表 20～25 の所在地については、紙幅の都合により「御崎浦」「勝本浦」「前目浦」の表記を省略した。

表 23 安政4年（1857）益富御崎・前目冬組
の羽指割

所在地	平戸藩生月島	平戸藩杵岐
職種・鯨船名	羽指名	羽指名
勢 子	鷲右衛門 豊大夫 左次兵衛 浅次郎（大） 鱧 藏 紋大夫 与大夫（館） 竹三郎 牛 藏 左次右衛門 斎次郎 鉄 藏 伝 藏（館） 権四郎 三 藏	伝次右衛門 虎大夫 八大夫 惣大夫 清 藏 芳五郎 三 藏 政次郎 藤 作 磯大夫 金大夫 太郎藏 太平治 勝 藏 丹 吾 惣兵衛 弥太郎 太郎一
勢子持双	芳 太 原太郎	大 藏 太 郎 辰次郎 虎 藏
本持双	伝 吾 与 市（館）	伴 藏 利 八 彦 市 豊 吉
増羽指	留大夫（春勢子） 虎次郎 牛右衛門 音次郎（新）	吉次郎（春勢子） 三 六 熊次郎 虎左衛門 沢 藏 長大夫 作次郎 徳次郎
双海附	梶右衛門 卯三郎 丹 藏 太郎助 斎 吉（新） 徳次郎（新入）	善 吉 久大夫（名） 権大夫 亀之助 太兵衛 喜 市 国 藏 久 市 密 藏（名） 熊大夫（新）
増加子	亀大夫ノ彦次郎 豊大夫ノ市 藏 三 藏ノ寅次郎（新）	紋大夫ノ八次郎 亀之助ノ松次郎 太平次ノ与 八 卯右衛門ノ幾太郎 太郎藏ノ弥之助（新） 豊次郎ノ作 藏（新）
小八丁乗	久米七	

出所）「安政4年 巳冬惣組羽指割」（益富資料1110）より作成。

備考）本史料には「11月7日割」とある。

表 22 安政3年（1856）益富御崎・勝本冬組
の羽指割

所在地	平戸藩生月島	平戸藩杵岐
職種・鯨船名	羽指名	羽指名
勢 子	太五郎 鷲右衛門 豊大夫 左次兵衛 三 藏 藤 作 紋大夫 金大夫 与大夫（館） 勝 藏 竹三郎 佐次右衛門 斎次郎 鉄 藏 伝 藏（館）	梶右衛門 勝大夫 徳 藏 虎大夫 八大夫 惣大夫 久大夫（名） 清 藏 芳五郎 浅次郎（大） 政次郎 鱧 藏 磯大夫 太郎藏 太平次 牛 藏 丹 吾 惣兵衛 弥太郎 権四郎
勢子持双	太郎一 芳 太	三 藏 大 藏 太 郎 辰次郎
本物双	原太郎 伝 吾 豊	虎 藏 伴 藏 利 八 彦 市
増羽指	留大夫（春勢子） 小 伝 与 市（館） 虎次郎	吉次郎（春勢子） 吉 六 三 六 熊次郎 虎左衛門 沢 藏（新） 牛右衛門（新） 長大夫（新）
双海附	卯三郎 権大夫 丹 藏 馬左衛門 卯太郎 太郎助	善 吉 卯右衛門 太次郎 亀之助 太兵衛 密大夫 喜 市（春勢子） 久 市（春勢子） 国 藏（名） 密 藏（名）
増加子	鱧 藏ノ音次郎 金大夫ノ彦次郎（新） 豊大夫ノ市 藏（新）	政次郎ノ作次郎 辰左衛門ノ徳次郎（新） 紋大夫ノ八次郎（新） 亀大夫ノ松次郎（新） 太平次ノ与 八（新） 卯右衛門ノ幾太郎
小八丁乗	久米七	

出所）「安政3年 11月 辰冬惣組羽指割」（益富資料1106）より作成。

備考）他表の史料では「亀之助ノ松次郎」とあるが、本史料では「亀大夫ノ松次郎」と記されている。

表 25 安政 5 年（1858）益富前目・板部春組の羽指割

所在地	平戸藩壱岐	五島藩板部
職種・鯨船名	羽指名	羽指名
勢 子	虎大夫 惣大夫 芳五郎 政次郎 磯大夫 太郎蔵 惣兵衛 太郎一 国 蔵（春） 大 蔵（春）	伝次右衛門 八大夫 勢 蔵 三 蔵 藤 作 金大夫 太平治 丹 吾 弥太郎 吉次郎
勢子持双	太 郎 伴 蔵	辰次郎 虎 蔵
本持双	彦 市 兼 作（新）	利 八 豊 吉
双海附	久大夫 亀之助 喜 市 虎左衛門 熊大夫 徳次郎	善 吉 権大夫 太兵衛以 久 市
増羽指	三 六 甚 作（新）	熊次郎 沢 蔵 長大夫 作次郎
増加子	太郎蔵ノ弥之助 紋大夫ノ八次郎 卯右衛門ノ幾太郎	亀之助ノ松次郎 太 平ノ与 八 豊次郎ノ作 蔵

出所）「安政5〔年〕午春前目板部羽指若衆面附帳」（益富資料 1109）より作成。

備考）「太郎蔵」と「惣兵衛」の間には羽指名（勝蔵カ）が記されているが、その上に付紙が貼られ、「病氣不参」とある。また、他表の史料では「太平次ノ与八」とあるが、本史料では「太平ノ与八」と記されている。

表 24 安政 5 年（1858）益富御崎・勝本冬組の羽指割

所在地	平戸藩生月島	平戸藩壱岐
職種・鯨船名	羽指名	羽指名
勢 子	鷲右衛門 豊太夫 左次兵衛 浅次郎（大） 鱈 蔵 紋太夫 与太夫（館） 丑 蔵 斎次郎 鉄 蔵 弥太郎 伝 蔵（館） 権四郎 三 蔵 芳 太 大 蔵	伝次右衛門 虎太夫 八太夫 惣太夫 清 蔵 芳五郎 政次郎 藤 作 磯太夫 金太夫 太郎蔵 太平次 勝 蔵 竹三郎 丹 吾 惣兵衛 太郎一 国 蔵
勢子持双	虎 蔵 利 八	太 郎 辰次郎 原太郎 伴 蔵
本持双	伝 吾 与 市（館）	彦 市 豊 吉 兼 作（壱州） 三 六
増羽指	留太夫（春勢子） 虎次郎 熊次郎 牛右衛門 音次郎	虎左衛門 沢 蔵 長太夫 作次郎 徳次郎 甚 作（壱州） 島 吉（壱州新） 猶 助（壱州新） 金太夫ノ彦次郎（新） 紋太夫ノ八次郎（新） 亀太夫ノ松次郎（新） 太平次ノ与 八（新）
双海附	勝太夫 卯三郎 三 蔵 太郎助 熊太夫 徳次郎	善 吉 権太夫 太兵衛 丹 蔵 久米七 左次右衛門 喜 市 久 市 作十郎（壱州新） 長右衛門（壱州新）
増加子	豊太夫ノ市 蔵 三 蔵ノ虎次郎 伝次右衛門ノ芳蔵（新） 三 蔵ノ左助（新）	卯右衛門ノ幾次郎 太郎蔵ノ弥之助 豊次郎ノ作 蔵 伝太夫ノ徳五郎（新） 善 吉ノ亀太郎
小八丁乗	吉次郎	

出所）「安政 5 午冬惣組羽指割」（益富資料 1101）より作成。

備考）表 2～22 のもとになった史料では「大夫」と記されているのに対し、本史料では明確に「太夫」と記されているため、本表では原文にしたがい「太夫」と表記した。また、御崎組の「斎次郎」「弥太郎」「芳太」「大蔵」「三蔵（双海附）」「徳次郎」の 5 名には白丸「○」が付されており、「御崎組」の末尾には「○印板部直り」と記されている。

表 26 安政 7 年（1860）益富御崎・板部春組の羽指友押割

所在地	平戸藩生月島			五島藩板部		
職種・鯨船名	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地	羽指名	友押（船頭）名	友押の出身地
勢 子	寅大夫 八大夫 佐次兵衛 鱈 藏 太郎藏 与大夫 竹三郎 丹 吾 鉄 藏 伝 藏 太郎一 留大夫 原太郎	金四郎 与次郎 和 平 権 八 紋次郎 七 藏 亀 吉 幸 作 庄 藏 三 六 弥 平 久太郎	宇久島 宇久島 宇久島 小値賀 宇久島 宇久島 宇久島 宇久島 宇久島 小値賀 宇久島 宇久島 春お館新敷	伝次右衛門 清 藏 浅次郎 政次郎 紋大夫 太平次 勝 藏 惣兵衛 弥太郎 権四郎 三 藏 大 藏 辰次郎 寅 藏	貞 吉 又五郎 助大夫 長 八 末 吉 常 藏 久次郎 善 市 初五郎 源右衛門 虎 吉 千 藏 熊 吉 甚助（御崎お下り）	井 浦 小 串 音 琴 音 琴 千 綿 神 浦 小 口 敷 住 敷 住 江 島 宇久島 宇久島 宇久島 宇久島
勢子持双	利 八 伝 吾	辰 藏 千 太	宇久島 宇久島	伴 藏 彦 市	彦 作 芳 松	瀬 戸 瀬 戸
本持双	豊 吉 三 六		宇久春出 壺部春出	与 市 熊次郎	助 作 武 作	瀬 戸 神 浦
増羽指	虎次郎 寅左衛門 音次郎 与 八			沢 藏 作次郎 徳次郎 松次郎		
双海附	善 吉 卯三郎 太兵衛 熊大夫	要 助 幾次郎 五 郎 善五郎（勢子お）	宇久島 宇久島 宇久島 宇久島	権大夫 三 藏 喜 市 長大夫	金 平 平 七 左 平 喜太郎（御崎お下り）	神 浦 神 浦 宇久島 宇久島
増加子	太郎藏ノ弥之助 三 藏ノ寅次郎 伝次右衛門ノ芳藏			宇太郎ノ幾太郎 善 吉ノ亀太郎 三 藏ノ左 助		
小八丁乗	国 藏					
双 海		為 吉 久 吉 佐 七 初五郎	田 島 田 島 靱 宇久附お		惣 吉 五 郎 初太郎	田 島 田 島 田 島 宇久春出
網大工		八郎治			勇 平	

出所）「安政 7 申春羽指若衆割」（益富資料 1257）より作成。